



手労研と私の30年の断片

前事務局長 森 下 一 期

手労研が30年、そして私は還暦になっている。つまり、手労研が発足したとき私たち（須藤さん、宮津さん）は30歳だった。出発の頃、年配の指導的な人はいなかった。顧問といった形で協力はして貰うが、若い者で新しく作っていこうと語り合ったものである。研究会の名前を「子どもの遊びと手の労働研究会」としたのも、研究実践の対象をはっきり示した方がよいだろう、10年も続ければものになるかもしれない、と話し合った結果であった。そういった気持ちで始めたこともあり、例えば会報の月刊は続けたいと思った。かなり早い時期に第三種郵便の認可を得たことにもその頃の思い入れがあったからだと思う。ある年配の研究者は、そのようにやっていた手労研の姿に、“勢いがある”と批評してくれた。実際、会報発送数1000通を越えたのは会の発足2年くらいの頃だと思う。当時、それをこなしていたということを今思うとかなりすごいことをしていたのかな、とってしまう。

しかし、知らぬ間に、かつての若手が、当時何となく煙たい思いをしていた“年配者”になってしまっている。だから、今現在、私が“煙たい存在”になっていないかと、ときどき振り返るこのごろである。

とは言え、この30年間に私たちは何かをしてきたのではないかと考えている。それ

を、私は、故宮津さんの取り組みを通して確認しようとしたのが、この一年の仕事だったといえる。

この6月、宮津さんの追悼記念誌『子どもとともに作る喜びを——宮津濃さんの工作・技術教育の世界——』を仕上げるにあたり、彼の実践報告、論文を可能な限り目を通そうと思った。宮津さんが先だったのは大変悲しいことだが、それだから宮津さんの仕事を対象化して見ることができたように思う。その作業を通して、宮津さんの仕事の現代日本における意味と意義を再確認することができた。今まさに子どもたちに不可欠であるモノとの関わりを、子どもが彼や彼女の生活の文脈の中で、楽しみ、喜びを実感しつつ取り組むことができる教材の選択に見事に現れていたのである。

宮津さんの仕事にそれを見ることができたが、発足に関わった我々が客観的に何をなしえたか、ということは自分ではわからない。繰り返しになるが、還暦を超えた者にとっては、外からの批評に待つしかないと思っている。先にふれた私たち(?)が足を引っ張っていないか、やるべきことをしていないか、といったことを直言してくれると、その中で自らのあり方を出していくことができるのではないかと考えている。若干、他に依拠する論調になってしまったが、今感じていることである。